

埼玉アートシアター通信

2016 9月-10月

SAITAMA
ARTS THEATER
PRESS
VOL.65



フィリップ・ドゥクフレ カンパニーDCA
『CONTACT—コンタクト』

Compagnie DCA - Philippe Decouflé "CONTACT"

1万人のゴールド・シアター2016

蜷川幸雄、劇^{はげ}しき舞台

NBAバレエ団『Stars and Stripes』—スターズ&ストライプス—
埼玉県舞踊協会『ダンスセッション2017』

バッハ・コレギウム・ジャパン

NHK交響楽団 12人のチェリストたち
藤原真理

ニコライ・ホジャイノフ



前代未聞の大プロジェクト 白熱のプレ稽古！ 1万人の ゴールド・シアター 2016



いよいよ始動した、60代から90代の男女による、世界最大級の群集劇『1万人のゴールド・シアター2016』。地元埼玉、東京、神奈川、千葉といった関東圏はもちろん、北は北海道から南は宮崎、アメリカ在住の日本人からも参加者が集う。9月開始の稽古に先がけて行われた、プレ稽古のレポートをお届けしよう。

CONTENTS

- 03 〈PLAY〉 前代未聞の大プロジェクト 白熱のプレ稽古！
『1万人のゴールド・シアター2016』
- 06 連載《蜷川幸雄、劇しき舞台》
過激に駆け抜けた生涯 最晩年にひとときわ輝く『リチャード二世』
山口宏子
- 08 〈DANCE〉 多彩なパフォーマーが繰り広げる、“ドゥクフレ流ミュージカル”
フィリップ・ドゥクフレ カンパニー-DCA
『CONTACT-コンタクト』
- 10 〈DANCE〉 埼玉で観る、特別な二つのダンス公演
NBAバレエ団『Stars and Stripes』-スターズ&ストライプス-
埼玉県舞踊協会『ダンスセッション2017』
- 12 〈MUSIC〉 海外で、そして彩の国で——
バッハ・コレギウム・ジャパンと《ミサ曲 口短調》
- 14 〈MUSIC〉 チェロの扉を開く
NHK交響楽団 12人のチェリストたち
「次代へ伝えたい名曲」第8回 藤原真理チェロ・リサイタル
- 16 〈MUSIC〉 ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.30
ニコライ・ホジャイノフ ピアノ・リサイタル
「音楽と詩は姉妹」——日本語で和歌を愛でるロシア・ピアノ界の俊才
- 18 REVIEW
- 20 イベントカレンダー／チケットインフォメーション／彩の国シネマスタジオ
- 23 INFORMATION
- 24 〈COLUMN〉 岩松 了 連載「どっちつかずの天使」

〔表紙〕 フィリップ・ドゥクフレ カンパニー-DCA 『CONTACT-コンタクト』 Photo © Laurent Philippe
編集 © 川添史子、榊原律子 デザイン © 柳沼博雅
© 公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団 Published on 15 September 2016 All Rights Reserved by Saitama Arts Foundation
※掲載情報は、2016年8月25日現在のものです。公演は追加および一部変更される場合がありますので、ご了承ください。

埼玉 **アートシアター** 通信

2016 9月-10月
SAITAMA
ARTS THEATER
PRESS
VOL.65



1万人の
ゴールド・シアター
2016



なにせ『1万人のゴールド・シアター2016』は、全出演者数が約1,600人、公演場所はさいたまスーパーアリーナである。プレ稽古が行われた彩の国さいたま芸術劇場の大稽古場は、一度に稽古ができるのが120人前後。参加者全員が各々一度稽古を受けるためには、7日間の午前と午後、計14回に分けて稽古しないとこなせない。

取材で訪れたのは稽古中日。稽古場には期待と不安が混ざったような表情の参加者たちが、続々と集まって来た。そんな彼らの複雑な思いを察したのか、冒頭「高みを目指し、思いを持って頑張りましょう！」と、作・演出を務めるノゾエ征爾が挨拶した。続いて演出助手のハキハキとした指導による準備体操。「無理はしないでくださ



い」という声も飛ぶが、どうしてなかなか、皆さん柔軟性もあり、軽々と動いているように見えた。

次は集団で動く練習。円になって歩き、だんだんと歩くスピードを上げていく。続いて、輪になったままで、一斉に声を上げて泣いたり、大笑いしてみたりと、表情を作る稽古が始まった。これだけの人数がいっぺんに感情を表出させると、相当な迫力！ギリシャ悲劇のコロスさながら、「民衆の声」のように感じられる。杖をついた79歳の女性も果敢に参加しており、周囲の人たちは自然に彼女をサポートしている。それぞれができる範囲で、けれども出来る最大の熱意で指示に答えていた。

ロミオとジュリエットのセリフを実演！

最後はついに、セリフの練習。シェイクスピア『ロミオとジュリエット』のバルコニーの場面が稽古用テキストとして選ば

れ、男女に分かれ、一人1行ずつ声を出していく。「君の光が消えて、百万倍も不機嫌だ」「ロミオ、ねえ、ロミオ！」……。大きな声で叫ぶ人、朴訥とした口調だけれども味のある人、俳優のような渋い声の人、乙女のように可愛らしい人。その人の人生が透けるような、幾通りものロミオとジュリエットは、見応えがある。演出家から「ロミオを、好きな人の名前にしてもいいですよ！」という指示が飛ぶと、旦那さんの名前、ごひいきの歌手の名前など、思い思いの愛する人の名前を叫び、場が笑いに包まれる一幕も。『ロミオとジュリエット』は、本番でもモチーフとなる戯曲だそう。

トータル1時間半。終始パワフルにメニューをこなした参加者たちは、文字通り〈燃焼〉したような、湯気の出そうな上気した表情。9月に始まる本稽古に向けて、自信がついたことだろう。「楽しかった！」と帰っていく姿は、実に若々しい。

「『蛭川さんの演出を受けたい』と思って応募して来た方たちなので僕で大丈夫かな？という不安もありましたが、みなさん積極的で、まったくの杞憂でした。〈老人〉という単語が完全にミスマッチ。想像していた以上に活気にあふれています。『大きな企画に参加したいんだ』という意欲に、こちらもうれしくなります」と話すのは、この日の稽古を終えたノゾエ。「これを作品の形におさめていく作業が必要になりますが、今のこの活気が小さくならないよう、そのまま作品に生かす方法を考えたい。壮大な演劇にしたいですから」と早くも手応えを感じたようだ。

プレ稽古とは思えない参加者の熱気と情熱を感じ、本稽古に期待が高まった。



八代郁子さん(埼玉・72歳)

「普段、大きな声を出すことなんてないので、清々しい気持ちになりました」と話す八代さん。40年前に蛭川幸雄氏を青山の喫茶店で見かけたことがあり、現在、家は劇場のすぐ近く。縁を感じて勇気をふりしぼって応募したそう。



水野まさ子さん(愛知・66歳)

地元愛知で、演劇活動をしているという水野さん。格安バスを使って、はるばる埼玉までやってきた。「このものすごい大人数での芝居を、一体どうやって作り上げるのか、その過程に興味があります」と好奇心でキラキラとしていた。



早川正三 & 京子 夫妻
(神奈川・80歳 & 73歳)

旦那様が数年前に脳梗塞で倒れ認知症を発症、進行スピードが遅くなればと、ご夫婦で参加。正三ロミオのセリフがただ者ではない風格だったが、やはり演劇経験者！「演劇で元気に」と話す奥様も、施設などで朗読をされているとか。



野口 泉さん(埼玉・91歳)

「兵役で旧満州にも行きましたが、シベリアに行かず生き延びた。運がいいんですね」と話すのは参加者最高齢、91歳の野口さん。「人生経験としてやってみたくと思って応募しました」という、若者のような、頼もしいお言葉！

参加者の方たちに稽古の感想や参加動機を伺いました

彩の国さいたま芸術劇場での蜷川幸雄作品を振り返る連載二回目は、長年蜷川氏の舞台取材してきた山口宏子氏。「さいたまゴールド・シアター」と「さいたまネクスト・シアター」での挑戦と意義を照らす。

過激に駆け抜けた生涯 最晩年にひとときわ輝く『リチャード二世』

文●山口宏子

2006年1月、蜷川幸雄さんは70歳で、彩の国さいたま芸術劇場の芸術監督に就任した。

就任が決まり、最初に表明したのが、高齢者だけの劇団を作る計画だった。演技経験のない人々を集めて訓練する。老後の趣味ではなく、プロの劇団に育てる。いずれ世界を目指す、というのだ。

素人のお年寄りを、プロに!?
誰もが驚いた。

蜷川演出の特徴の一つに「開幕3分」がある。衝撃的な冒頭場面で、観客を日常から一気に劇の世界へ連れ去る手法だ。観客をあっという間に、しかも劇の本質を一目で伝える。今思えば、高齢者劇団の構想は、芸術監督版「開幕3分」だった。皆を驚か

せ、同時に「彩の国」から何を発信するかを表明したのだ。

市井の暮らしの中で、長い歳月を心身に刻んできた人たちの表現を磨き、俳優にする。蜷川さんはそこに二つの可能性を見ていた。高齢者が演劇を通じて、新しい自分と出会うこと。そして、新しい舞台芸術の創造だ。未知の領域に踏み込み、時間も手間もかかるこうした試みこそ、地域の公共劇場にふさわしい。そう考えた。

「さいたまゴールド・シアター」と名付けられた劇団は、スタートから「事件」になった。20人の団員募集に、国内外から約1,200人が名乗りをあげたのだ。蜷川さんはオーディションの日程を延長して全員と面接し、48人を選んだ。平均年齢66・7歳。

発足の記者会見で稽古場に並んだ団員たちは誇らしげな笑顔だった。

だが、稽古が始まると問題が続出した。せりふや動きが覚えられない。覚えても忘れる。発声や動きが安定しない。本人や家族の病気、けが……。公演でミスが続き、蜷川さんが観客にわびて、最初からやり直したこともある。

出演者は稽古初日までにせりふを完璧に覚え、演技を磨き上げる。そんなふだんの「蜷川演劇」からゴールドは遠い。だが、それを欠点ではなく強みにしたのが、第3回公演『アンドゥ家の一夜』(2009年)だった。台本完成が遅く、せりふの不安が大きい。そこで、舞台の四隅にプロンプターを配し、それも演出にした。蜷川さんもプロンプターとして登場し、客席を沸かせた。弱みを隠さず人間を丸ごと見せる。それも豊かな観劇体験であることが示された。

団員たちも次第に変わり始めた。演技



2009年9月4日さいたまネクスト・シアター第1回公演「真田風雲録」製作発表記者会見
作者・福田善之氏のほか、さいたまゴールド・シアターも同席した

の不安定さが減り、代わって、一人ひとりの個性がくっきり現れてきた。風格、ひょうきんさ、憂い、色気、活力、たおやかさ……。人として年季が入っているから、それぞれが濃い。失敗を恐れない度胸、ラブシーンも下着姿も平然とこなす豪胆さからは、老いることで獲得した強さと自由が伝わってくる。しかも、舞台の上の団員は、10年前より若々しく見えてきた。

そうなる中、暮らしの中で身についた立ち居振舞いの説得力が増す。代表例が『鴉よ、おれたちは弾丸をこめる』だ。法廷を占拠した老女たちが裁判官らに死刑を言い渡す物語だが、彼女らは、洗濯物を干したり、炊事をしたりといった「生活」で法廷を埋め、権力と対峙する。民衆の力を象徴する、圧巻の場面だった。この作品はパリ、香港公演でも絶賛された。

蜷川さんは2009年、もう一つの劇団を作った。無名の若手を集めた「さいたまネクスト・シアター」だ。

外見も中身もゴツゴツと存在を主張するゴールドとは対照的に、表情も野心も淡泊に見える若者たちを、蜷川さんは「蒼白の少年少女」と呼び、内外の名作戯曲で鍛えた。世界と自分との違和感を表す時の彼らに、蜷川さんは新しい光を見出した。「彩の国」の両輪となったゴールドとネクストは、2015年、シェイクスピアの史劇『リチャード二世』を合同で上演した。

体調が優れず、車椅子に乗り、酸素吸入

をしながらの稽古だったが、蜷川さんはそんな自身の姿を舞台に映し出した。

冒頭、舞台の奥から、老人たちが乗った30台もの車椅子を、若い男女が押して登場する。みな和服で正装し、談笑している。旧家の祝い事に親族が集まったような光景だ。突然、タンゴが鳴り響き、老人と若者は抱き合って踊り出す。充満する官能の匂いの中、孤高の王リチャード二世が電動車椅子で登場する。

なんと鮮烈な幕開けだろう。

その後も、床を覆う波布、空飛ぶ王冠、光で描く十字架など、瑞々しいイメージが次々と繰り出され、若き英国王の運命を美しく、悲しく彩ってゆく。ネクストの成長



さいたまネクスト・シアター第3回公演
「2012年・蒼白の少年少女たちによる『ハムレット』」稽古
Photo◎宮川舞子

と、生活感や威厳を醸し出すゴールドの存在の厚みが融合合う。群像をダイナミックに動かし、一人ひとりの輪郭を明確に描く演出が冴える。世界のどこにもない舞台が出現した。

「枯れた老人にはならない」の口癖通り、蜷川さんは過激に生涯を駆け抜けた。『リチャード二世』はその最晩年の傑作として、ひととき大きく輝いている。

山口宏子

Hiroko Yamaguchi

演劇記者。1983年朝日新聞社に入社。80年代の終わりから、演劇の取材と劇評の執筆を担当。編集委員、論説委員(文化担当)などを務めた。2003年から2004年早稲田大学演劇博物館客員研究員。昨年、蜷川氏と共著で『蜷川幸雄の仕事』(新潮社)を刊行した。



2006年4月21日さいたまゴールド・シアター発足記者会見



さいたまゴールド・シアター第3回公演「アンドゥ家の一夜」
プロンプター(俳優がセリフを忘れた際、伝える役割)として開演を待つ蜷川氏
Photo◎宮川舞子



2015年4月19日彩の国シェイクスピア・シリーズ第30弾「リチャード二世」千穉楽に Photo◎宮川舞子

多彩なパフォーマーが繰り広げる、 “ドゥクフレ流ミュージカル”

アクロバティックなダンスに迫力のライブ演奏、変幻自在の舞台装置、豪華でユニークな衣裳、めくるめく映像美——ゲーテの戯曲『ファウスト』をモチーフに繰り広げる、ドゥクフレ最新作が来日する。あらゆるアートを融合した作品に込めた思いを語ってもらった。

取材・文◎乗越たかお Takao NORIKOSHI (ヤサぐれ舞踊評論家)

Photo◎宮川舞子



フィリップ・ドゥクフレ

Philippe Decouflé

振付家・演出家。1983年カンパニーDCA設立。1992年アルベルビル冬季五輪開会式を31歳の若さで手がけ、サーカスとダンスが交錯する奇想天外な演出で一躍世界に知られる。1994年『ブティック・ピエス・モンテ』で初来日。2003年日仏中の国際共同製作として『IRIS』を日本初演。DCAでの活動のほか、CM・ミュージックビデオや、パリの老舗キャバレー クレイジー・ホースのショーを演出・振付するなど、ジャンルを横断して幅広く活躍。現在、ブロードウェイにてサーカス集団 シルク・ドゥ・ソレイユの新作『Paramour』を上演中。

チケット発売中

フィリップ・ドゥクフレ カンパニーDCA
『CONTACT-CONTACT』

10.28(金)開演19:00、29(土)・30(日)開演15:00

彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

〔演出・振付〕フィリップ・ドゥクフレ 〔出演〕カンパニーDCA

チケット(税込) 一般 S席6,500円 A席4,000円

U-25* S席3,500円 A席2,000円

メンバーズ S席6,000円 A席3,600円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。
**A席(サイドバルコニー・2階席の一部)は舞台の一部が見切れます。予めご了承ください。
**演出の都合により、開演時間に遅れますとお席へのご案内ができない場合がございます。
**愛知、新潟公演あり。



フィリップ・ドゥクフレ カンパニー DCA

2年前に彩の国さいたま芸術劇場で自身のベスト版ともいえる作品『PANORAMA—パノラマ』を上演し、大人気を博したドゥクフレが、新作を持って埼玉に帰ってくる！美しくも楽しくキテツな、ミュージカル仕立てのダンス作品である。「役者、ダンサー、サーカス・アーティスト……14人の出演者は多様な特技を持ち、体型もキャラクターも個性的。明確なストーリーはありませんが、全体を紡ぐ糸としてゲーテの『ファウスト』を使っています。まず物語として面白いし、神を出し抜こうとしている点も、きわめて現代的ですからね。もう一つアルフレッド・ジャリの『フォーストロール博士言行録』のテキストも使います。じつはこちらもファウストのことで、神の表面積を計測しようとする数学的な話に惹かれました」

この「フォーストロール (Faustroll)」は

ジャリの得意な言葉遊びで、「ファウスト (Faust)」と北欧神話の「トロール (troll)」の合成語である。フィリップの舞台では聖俗さまざまな要素が絶妙に織り込まれている。

さらに二人のミュージシャン(ノスフェルとピエール・ル・ブルジョワ)の生演奏も聞きどころだ。

「彼らとは2度目の共演ですが、たった二人でオーケストラに匹敵する仕事をしています。ノスフェルは、とても特徴のある声をしているんです」

今回はミュージカルなので、歌は出演者全員が歌うのだが、皆、初めからあんなにうまかったのだろうか？

「いやまあ、途中であまりうまくないのが3人いることに気づいて、出番を調整しましたが(笑)、ほかの人は皆うまいですよ」

今回は衣裳や美術も見どころだ。ポス

ターに使われているローレンス・シャルーの衣裳は、一目見たら忘れられないインパクトである。

「彼らとの仕事は本当に楽しい。舞台美術のジャン・ラバスはアルベルビル・オリンピックの開会式(1992年)のころから一緒です。今回の美術はドイツ表現主義の『カリガリ博士』(1920年制作のサイレント映画)のモチーフがあったり、あの時代の作品へのオマージュが多数入っています」



『CONTACT-CONTACT』

なるほど『カリガリ博士』では、狂人である主人公の内面を表現するため、部屋全体のパースが歪んでいるのだが、本作でもそういう美術が登場する。となると『カリガリ博士』と同時代に活躍したロイ・フラール(ヒラヒラする衣裳に照明を当てる演出でモダンダンスの祖といわれる一人)や、バウハウスのオスカー・シュレンマーによるトリアディック・バレエ(奇妙な衣裳とポージングで独特のダンスを生み出した)を思わせるシーンがあるのも納得だ。「私はあの時代のアートからさまざまな影響を受けています。ドイツ表現主義という点では、この作品全体がピナ・バウシュへのオマージュと言えます。しかしそれらはノスタルジーではなく、現代の作品として魅力あるものにしなければならない。それには多様な要素をミックスし、特にビジュアルの見せ方が重要になってきます」

ドゥクフレの映像は独特で、映画発明以前の幻灯(ファンタスマゴリア)のようなローテクの味わいを大切にしている。今回もさながら万華鏡のような映像がある。「過去の映画を参照しているシーンもあります。今回は『ウエスト・サイド物語』風に、町の景色の中でダンサーが踊るように使っていますよ」

さらに劇中では、いま新しい波として世界的に盛り上がっている現代(コンテンポラリー)サーカスのアーティストも効果的に使われる。先だってドゥクフレがブロードウェイで作ったシルク・ドゥ・ソレイユ『Paramour』が大きな話題になったが、そもそも彼はサーカス学校出身で、現代サーカスのパイオニアなのである。

「優れたジャグラーは、ダンサーに振り付けることを物に対してやっているだけで、本質的には同じだと思います。私にとって

ダンスとサーカスは区別のない存在ですね」

さてタイトルの「CONTACT」は、セルジュ・ゲンスブールがブリジッド・バルドーのために書いた歌のタイトルだという。「ただ曲の著作権使用料が高額なことが後からわかったため、曲を使うのは断念したものの、タイトルはそのまま使っています(笑)。〈CONTACT=接触〉という、現代社会ですでに失われつつある概念を問い直したいし、国を超えるダンスという言葉を通した観客と触れあい、絆を作っていきたい。これは私のカンパニー作品としては最大規模で、これだけのものはもう作れないでしょう。そしてこの日本公演は、世界ツアーの締めくくりになります。10月に日本の皆さんにお会いできるのを楽しみにしています！」

埼玉で観る、特別な二つのダンス公演

埼玉県所沢市に拠点を持つNBAバレエ団と彩の国さいたま芸術劇場との初の提携公演『Stars and Stripes』。

そしてピナ・バウシュ・ヴッパタル舞踊団でダンサーおよび振付家として現在世界各国で精力的に活躍する瀬山亜津咲&ファビアン・プリオヴィル振付による埼玉県舞踊協会との提携公演『ダンスセッション2017』。

この冬、彩の国さいたま芸術劇場でしか観られないダンス公演の中身をチェックいただく。

文●上野房子(ダンス評論家)



NBAバレエ団 『Stars and Stripes』

—スターズ&ストライプス—

バレエ団とは、運命共同体のような集団だ。トップに立つ芸術監督が交代すれば、レパートリーに変化が生じ、ダンサーたちは新たな表情を映し出す。埼玉県所沢市に拠点を持つNBAバレエ団では、2012年に久保絏一が芸術監督に就任して以来、彼が厳選したサプライズに満ちた作品の上演を続けている。彩の国さいたま芸術劇場との初の提携公演『Stars and Stripes』には、久保カラーに彩られた3作品がお目見えする。

まずは、「アメリカでの20年におよぶキャリアのなかで出会った素晴らしい作品」と久保が称する『スターズ&ストライプス』。ジョージ・バランシンが振り付けた、底抜けに楽しいアメリカン・バレエである。威勢のよいマーチ「星条旗よ永遠なれ」ほか、スーザの音楽にのって、アメリカ国旗をかたどった衣裳姿のダンサーが舞台を駆け巡る。

コロラド・バレエ団員当時の久保の当り役で、美技満載のパ・ド・ドゥはガラ公演として親しまれているが、全編を日本のバレエ団が上演するのは、今回が初めて。数々のアメリカ生まれの作品をレパートリーに持つ同団が、初めて挑むバランシン作品でもある。現役時代の久保同様、卓越した身

体能力を持ち、ローザンヌ国際バレエコンクールで一位に輝いた二山治雄をゲストに招いた人選が心憎い。

意外性のあるアーティストを招いて創作に取り組むことも、同団の指針のひとつで、今回は二つの新作が誕生する。

ダレル・グランド・ムールトリーは、ジュリアード音楽院卒業後、ダンサーとして種々の舞台で踊り、バレエ、モダンダンス作品はもとより、ピョンスの世界ツアーにも振付家として関わった異才。様々な引出しを持つ振付家と日本人ダンサーの初競演が実現する。

もう一つの新作には、音楽家や美術家とのコラボレーションなど、時宜を得た企画を打ち立ててキャリアを躍進させ、ミュージカル、シンクロナイズドスイミング、フィギュアスケートの振付も手がけてきた平山素子が指名された。「メイド・イン・ジャパンの世界初演作の世界発信」を目指す久保の思いを体現すべく、平山がオリジナルの楽曲を使ってNBAバレエ団の新生面を切り開く。

久保いわく、「いま、私が皆様にお伝えしたい事がすべて入った、欲張りなプログラム」である。



『ダンスセッション2017』

ピナ・バウシュ ヴッパタル舞踊団の瀬山亜津咲が、彩の国さいたま芸術劇場に戻ってくる。2014年夏にさいたまゴールド・シアターのメンバーとともに『KOMA』を作り上げた彼女が、埼玉県舞踊協会との提携公演で新作を発表するのだ。

〈ダンスセッション2017〉こと、埼玉県舞踊協会の所属ダンサーが、国内外の振付家による新作などを踊る連続企画。定期的に彩の国さいたま芸術劇場で開催され、テロ・サリネンが自身のカンパニーの来日公演に先がけ、〈ダンスセッション2014〉に新作を提供したことは記憶に新しい。

先ごろ、瀬山および共同振付者で彼女の夫君でもあるファビアン・プリオヴィルが、2日間にわたってオーディションを兼ねたワークショップを実施した。ただしその時点では、ピナ作品や『KOMA』の創作プロセスがそうであったように、作品の構想は白紙の状態。選考された出演者と稽古場で向き合った時、初めて実際の創作が始動する。二人は彼らにさまざまな問いを投げかけ、返ってきた答え……言葉かもしれないし、動きかもしれない……を取捨選択し、組み立てていく。

ピナ作品、あるいは『KOMA』を見た観客であれば、出演者が役を演じるのではなく、自分自身をさらけ出すことをご承知だろう。何気ない身体の動き、あるいは息づかいや目配せが、心の微細な動きを露わにする。喜び、悲しみ、戸惑い、疑い……。演じ手のごく身近で起きた日常のひとこまが連なり、やがて壮大にして切なく愛しいタンツァターとして観客と共有されることになる。

『KOMA』での瀬山は、セリフを語り、演じる鍛錬を重ねた演者たちを〈個〉に戻し、彼らの年齢を更に魅力的な経験として紡ぎ出した。一方、ダンスセッションの出演者は、ダンサーとして振付家が生み出したステップを踊る技術と圧倒的な若さを持った集団だろう。彼らの共同作業は、何処に向かっているのか。その行方を見届けたい。

*

「素晴らしい思い出が詰まった彩の国さいたま芸術劇場で作品を作る機会をいただきまして、たいへん光栄です。今回はファビアンと共同で振付をすること、また来年1月に始まるダンサーとのクリエイションは、たいへん充実した時間になるだろうと思っています」(瀬山)



瀬山亜津咲
Azusa Seyama

2000年ピナ・バウシュ ヴッパタル舞踊団入団以来、ピナ・バウシュの数多くの創作に参加し、レパートリー作品を踊る。映画『Pina/ピナ・バウシュ 踊り続けるいのち』(ヴィム・ヴェンダース監督/2011年)にも出演。個人の活動では日本を始め世界各国でのワークショップ、さいたまゴールド・シアター × 瀬山亜津咲の演出・振付を2013年にワーキングプロセス公開を経て、2014年『KOMA』を発表。同年、fabien prioville dance companyのプロジェクト『time for us』で夫ファビアン・プリオヴィルと共演。同カンパニーのアシスタントも務めている。



ファビアン・プリオヴィル
Fabien Prioville

1999年ピナ・バウシュ ヴッパタル舞踊団に入団。2006年退団後はフリーで活動。振付家としてもジョセフ・ナジ、デイビス・フリーマンら多数のアーティストと作品を制作。2010年自身のカンパニーをドイツにて立ち上げ、数々の作品を発表。ルイズ・ルカヴァリエ、瀬山亜津咲などと共演。日本では2008年、2013年に認定NPO法人バレエノアとの作品『紙ひこうき』[3B]を発表。2015年ピナ・バウシュ ヴッパタル舞踊団出身のダンサーと日本人のアーティストのコラボレーション『SOMA プロジェクト』を発表し、ドイツ公演も行っている。



さいたまゴールド・シアター×瀬山亜津咲『KOMA』
Photo©高橋志津夫

チケット発売中

NBAバレエ団
『Stars and Stripes』—スターズ&ストライプス—
12.3(土)11:00/15:00、4(日)14:00
彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【出演】 NBAバレエ団 ゲストダンサー:二山治雄
【演目】 ダレル・グランド・ムールトリー振付:新作、平山素子振付:新作、ジョージ・バランシン振付:スターズ&ストライプス

チケット(税込)
一般 SS席10,000円 S席8,000円 A席6,000円/学生券2,000円
メンバーズ SS席9,000円 S席7,200円 A席5,400円

【主催】 NBAバレエ団 【提携】 彩の国さいたま芸術劇場
【公演のお問合わせ】 NBAバレエ団事務局
TEL.04-2937-4931(月~金 9:00~17:00) www.nbaballet.org

チケット発売中

埼玉県舞踊協会
『ダンスセッション2017』

2017年 2.5(日)13:00/17:00
彩の国さいたま芸術劇場 大ホール

【演目】 瀬山亜津咲・ファビアン・プリオヴィル振付作品: VENUS(仮題)
篠原聖一振付作品: Channel
埼玉全国舞踊コンクール創作舞踊部門第一位作品

チケット(税込) 全席自由 前売5,000円 当日5,500円

【主催】 埼玉県舞踊協会 【提携】 彩の国さいたま芸術劇場
【チケットのご購入・お問合わせ】 埼玉県舞踊協会 TEL.048-882-7530
※この公演はSAFチケットセンターでのお取り扱いはありません。予めご了承ください。

欧米でますます評価を高める
バッハ・コレギウム・ジャパン

昨今、ヨーロッパで音楽関係者やクラシック好きの方と話す、必ずと言ってよいほど、バッハのスペシャリストのミスター・スズキを知っているか？と聞かれる。その時、私は誇らしげにもちろん、と答える。でも20年前、筆者がヨーロッパに住み始めた頃は、バッハ・コレギウム・ジャパン(BCJ)を知っているのはCDを通じて彼らの演奏に触れていた一部の熱心な古楽ファンに限られていた。

BCJが欧米でより広く親しまれるようになったのは、やはり彼らが積極的に海外に出ていくようになったからに他ならない。実は筆者は彼らの初海外公演となった、1997年のフランス、ロワール川沿いの町サン・フロラン＝ル＝ヴィエイルの教会でのコンサートを聴いているが、その時は合唱と通奏低音奏者だけが参加し現地のアンサンブルと共演するという形のこぢんまりとした公演であった。しかしそれ以降、各地の音楽祭やコンサート・ホールから次々と招かれるようになり、1999年

にはイスラエル公演、2000年にはスペイン、ドイツを含む初のヨーロッパ・ツアーおよびオーストラリア公演、2003年の初の北米ツアーなど、毎年のように海外公演を行うようになり、欧米での知名度も飛躍的に高まっていった。

深化するBCJの《ミサ曲 口短調》
彩の国では15年ぶり

そうしたBCJの海外ツアーにおいて、折々に演奏してきた重要なレパートリーがバッハの《ミサ曲 口短調》である。最初にこの大作をヨーロッパで演奏したのは2005年のドイツ・アンスバッハでのバツ

ハ週間、続く翌年のヨーロッパ10都市の大ツアーではミラノ、アムステルダム、そしてロンドンで演奏した。そして忘れてならない2011年3月、東日本大震災直後に敢行された北米ツアーの曲目も《ミサ曲 口短調》であり、ニューヨークをはじめとする5都市での公演は震災の犠牲者への深い祈りをこめた演奏となった。カーネギー・ホールでの公演についてニューヨーク・タイムズ紙は「合唱とオーケストラは〈グロリア〉では喜びに満ちあふれ、〈エト・インカルナトウス・エスト〉では静謐さと深い集中力をもたらした。聴衆は明らかに心を動かされ、日本からの勇敢な訪問者

たちに長いオベーションを送った」と述べた。

筆者も2006年のロンドンおよび2008年のブリュッセルでの《ミサ曲 口短調》に強い感銘を受けたが、いずれの演奏にも共通して感じたのは、作品を貫く強い内的な推進力であった。よく知られているように、この作品はバッハがさまざまな時期に作曲したものを晩年になって人生の集大成として4部から成るミサ曲の形にまとめたものである。そのため、各部分には様式的な違いなどがあり、曲に一貫性を打ち出すのは実はかなり難しい。しかしながらBCJの解釈では、各部の曲調をはっきり出しな

がらも、第3部の〈クレド〉(特に第4〜6曲)に精神的な重さが置かれ、曲全体がそこを頂点としてしなやかな弧を描くように演奏される。これはきわめて説得力のある見事な解釈だと感じた。

これまでBCJは彩の国さいたま芸術劇場で定期的に演奏、また録音も行ってきたが、《ミサ曲 口短調》を取り上げるのは2001年以来、15年ぶりだという。鈴木が以前から、ピリオド楽器でバッハを演奏するには理想的な規模だと語る音楽ホールで、内外での経験を重ねて深化してきた《ミサ曲 口短調》をじっくりと味わいたい。

チケット発売中

バッハ・コレギウム・ジャパン
J. S. バッハ《ミサ曲 口短調》

11.12(土)開演15:00
彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

[出演] 鈴木雅明(指揮)
朴 瑛実、ジョアン・ラン(ソプラノ)
ダミアン・ギヨン(アルト)
櫻田 亮(テノール)
ドミニク・ヴェルナー(バス)

チケット(税込)
一般 正面席8,000円 バルコニー席7,000円
U-25*(バルコニー席対象)3,000円
メンバーズ 正面席7,200円

【関連企画】11.5(土) 17:30 鈴木雅明による
作品解説レクチャー [9.30(金) 応募が切]

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。
入場時に身分証明書をご提示ください。

バッハ・コレギウム・ジャパンの活動 in 彩の国さいたま芸術劇場

演奏会

1999	3月21日(日)	J. S. バッハ《マタイ受難曲》
	4月 3日(土)	J. S. バッハ《マタイ受難曲》
2000	6月 3日(土)	J. S. バッハ《ブランデンブルク協奏曲》全曲演奏会 1
	6月 4日(日)	J. S. バッハ《ブランデンブルク協奏曲》全曲演奏会 2
2001	10月27日(土)	J. S. バッハ《ミサ曲 口短調》
2002	3月29日(金)	J. S. バッハ《マタイ受難曲》
2003	7月27日(日)	ドラマ・ベルムジカ〜コーヒー・カンタータ&結婚カンタータ〜
2004	4月 9日(金)	J. S. バッハ《マタイ受難曲》
	4月10日(土)	J. S. バッハ《マタイ受難曲》
2005	12月23日(金・祝)	ヘンデル《メサイア》
2006	12月16日(土)	モーツァルト《レクイエム》他
2008	3月20日(木)	J. S. バッハ《マタイ受難曲》
	6月14日(土)	J. S. バッハ《ブランデンブルク協奏曲》全曲演奏会
2009	7月18日(土)	ヘンデル没後250年記念特別プログラム
2010	4月 3日(土)	J. S. バッハ《マタイ受難曲》
2011	12月23日(金・祝)	ヘンデル《メサイア》
2013	3月30日(土)	J. S. バッハ《ヨハネ受難曲》
	12月 7日(土)	モーツァルト《レクイエム》他
2014	4月19日(土)	J. S. バッハ《マタイ受難曲》
2015	12月20日(日)	ヘンデル《メサイア》
2016	11月12日(土)	J. S. バッハ《ミサ曲 口短調》

録音

- ◎[J. S. バッハ: クリスマス・オラトリオ BWV 248]
[BIS] (1998年1月収録) ……①
- ◎[J. S. バッハ: 世俗カンタータ集 BWV 210, BWV 211]
[BIS] (2003年7月収録)
- ◎[J. S. バッハ: 2台のチェンバロのための協奏曲集
BWV 1060, BWV 1061, BWV 1062、管弦楽組曲第1番]
[BIS] (2013年1月収録) ……②
- ◎[J. S. バッハ: ルター派ミサ曲集 1 - BWV 235, BWV 236]
[BIS] (2014年9月〜10月収録)
- ◎[J. S. バッハ: 世俗カンタータ集 5 - BWV 213, BWV 214]
[BIS] (2014年9月〜10月収録)

*このアルバムのうち、BWV Anh.26(抜粋)、BWV 242、BWV 238、BWV 237は
彩の国さいたま芸術劇場で収録。



海外で、そして彩の国で
バッハ・コレギウム・ジャパンと
《ミサ曲 口短調》

1999年に初登場以来、彩の国さいたま芸術劇場で毎年いきいきとした演奏を聴かせてくれるバッハ・コレギウム・ジャパン。18年目となる今年も、J. S. バッハの《ミサ曲 口短調》を演奏する。今や、世界で最も有名な古楽団体のひとつとなったバッハ・コレギウム・ジャパンにとって《ミサ曲 口短調》はこれまで海外公演でたびたび演奏しているレパートリー。この大作によってバッハ・コレギウム・ジャパンの名声は高まっていった。バッハ・コレギウム・ジャパンの海外での活動も、彩の国での活動も、ともに約20年。その歩みを振り返る。

文◎後藤菜穂子(音楽ライター)



2006年 アムステルダム ロイヤル・コンセルトヘボウ公演より Photo©Peter Sabelis

バッハ・コレギウム・ジャパンと彩の国さいたま芸術劇場は、本年、提携協定を締結いたしました。今後、公演関連レクチャーなどの教育プログラムにも取り組んでまいります。

チェロの扉を開く

NHK交響楽団 12人のチェリストたち

+

「次代へ伝えたい名曲」第8回 藤原真理チェロ・リサイタル

高音から低音まで、深く豊かに響くチェロの音は人間の声に最も近いといわれる、聴く人の心を強く打つ楽器。彩の国さいたま芸術劇場では、11・12月に2つのチェロ演奏会をお贈りする。NHK交響楽団のチェロ奏者たちが集う「NHK交響楽団 12人のチェリストたち」。日本を代表するチェロ奏者藤原真理が次代へ伝えたい名曲を披露するリサイタル。アンサンブルで、ソロで、チェロの魅力をじっくり堪能したい。

文●オヤマダアツシ (音楽ライター)

チェロは「魔力」を秘めた楽器

音楽ライターという仕事柄、多くの音楽家にさまざまなお話をうかがってきた。強く印象に残っているお話もたくさんある中で、チェロに関しては非常に興味深いことがひとつある。それは、何人かの方(しかもチェリストではない方も含め)が「音楽観を変えてしまったほど強烈なレコード」として、ジャクリーヌ・デュ・ブレが演奏するエルガーのチェロ協奏曲を挙げていたことだ。

デュ・ブレは1945年にイギリスで生まれ、10代の頃から天才肌の演奏を披露して注目されたにもかかわらず、多発性硬化症という難病でわずか10年ほどの演奏生活を閉じたチェリストである。エルガーのチェロ協奏曲は彼女のトレードマークであり、1965年に録音された演奏は強烈な個性ゆえ、半世紀たった今でもこの曲のベスト・パフォーマンスに選ばれることが多い。特に冒頭の序奏部に響く悲痛な重音は「音楽を奏でることの意味」を聴き手に問いかけ、それに心を打たれてしまった音楽家も少なからずいたということである。

おそらくチェロは、そういったパワー(いや、魔力と呼ぶべきだろうか)を秘めた楽器なのだ。J. S. バッハの名作である《無伴奏チェロ組曲》(全6曲)から、任意に1曲を選んで聴いてみよう。そこには力強さ、重厚さ、威圧的な雄々しさなどから、優雅な佇まいや、奥深い哀愁、悲痛なほどの苦しさ、そして心の平安を語るような静けさに至るまで、あらゆる感情が存在している。そのような表現力を有する楽器だからこそ、聴き手の心に存在する「琴線」という名のスイッチを共鳴させることができるのだろう。彩の国さいたま芸術劇場でもチェロの魔力に触れるチャンスがある。

チェロ・セクションの音の群舞 NHK交響楽団 12人のチェリストたち

まずは11月5日、NHK交響楽団のチェロ・セクション12人が「NHK交響楽団 12人のチェリストたち」として登場するコンサート。同じ楽器が音をぶつけ合い、また融合させることで生まれる迫力と厚み、メロディ楽器の魅力を思いきりアピールする歌など、合奏ならではの醍醐味を存分に披露してくれる。



Photo ©加藤英弘

12挺のチェロによるアンサンブル曲としては古典的作品であり、アマチュア・プレイヤーにも大人気であるユリウス・クレンゲル作曲の《賛歌》をはじめ、作曲家の三枝成彰が「ベルリン・フィル 12人のチェリストたち」のためにアレンジしたビートルズ・ナンバーや日本の名曲も披露。他の楽器も交えた「NHK交響楽団」として聴く場合と異なり、チェロ・セクションのみのサウンドは新鮮だろう。二重奏、四重奏、六重奏といったコンパクト編成での演奏もはさみつつ、音による群舞を見せてくれるようなコンサートになるはずだ。チェロを

チケット発売中

NHK交響楽団 12人のチェリストたち

11.5(土)開演14:00 (15:30終演予定)

彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

[出演] 藤森亮一、向山佳絵子、藤村俊介、桑田 歩、銅銀久弥、山内俊輔、西山健一、三戸正秀、村井 将、宮坂拓志、渡邊方子、市 寛也

[曲目] クレンゲル：賛歌*

クレンゲル：《組曲 二短調》作品22より〔二重奏〕

ヨンゲン：4本のチェロのための2つの小品 作品89〔四重奏〕

オッフェンバック：ボレロ〔六重奏〕

レノン&マッカートニー (三枝成彰編曲)：イェスタデイ、ミッシェル、

抱きしめたい、ハイ・ジュード*

三枝成彰編曲：日本の歌(おぼろ月夜、ずいずいづっころばし、

荒城の月、こんびらふねふね、てんさぐの花)*

*十二重奏

チケット(税込) 一般 正面席3,500円 バルコニー席2,500円

U-25*(バルコニー席対象)1,000円/メンバーズ 正面席3,200円

チケット発売中

彩の国さいたま芸術劇場シリーズ企画「次代へ伝えたい名曲」第8回 藤原真理 チェロ・リサイタル

12.10(土)開演14:00 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

[出演] 藤原真理(チェロ)、倉戸テル(ピアノ)

[曲目] ベートーヴェン：モーツァルトの《魔笛》の“娘か女か”の主題による12の変奏曲 へ長調 作品66

ベートーヴェン：チェロ・ソナタ第1番 へ長調 作品5-1

林 光：チェロ・ソナタ《十月の歌》

ブルッフ(ローズ編曲)：コル・ニドライ 作品47

チケット(税込) 一般 正面席4,000円 バルコニー席3,000円

U-25*(バルコニー席対象)1,500円/メンバーズ 正面席3,600円

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。



Photo ©Atsuya Iwashita

習っている方、アマチュア・オーケストラで弾いている方は必見・必聴。自分たちも演奏してみたい！とチャレンジ精神に火が付くかもしれない。

チェロの“声”を聴く 藤原真理チェロ・リサイタル

一方、12月10日に行われる藤原真理のリサイタルは、チェロとピアノによるスタンダードなデュオ・スタイルだ。

コンサートの前半はベートーヴェンの名作を。1790年代後半、まだ初期のピアノ・ソナタやピアノ三重奏曲などを手がけ

ていたに過ぎない時期ではあるが、着実にベートーヴェンらしさを模索している2つの作品だ。2楽章形式でありながらも新しい時代を見据えているチェロ・ソナタ第1番、そして憧れのモーツァルトにあやかりながらも得意とする変奏のテクニックを駆使した《モーツァルトの「魔笛」の“娘か女か”の主題による12の変奏曲》。数多くの共演で藤原とじっくり音楽を醸成させてきた倉戸テル(ピアノ)と共に、デュオ演奏の真髄を聴かせてくれそうな予感がする。

コンサートの後半は、オペラや合唱曲、器楽作品などをはじめとして数々の“歌”

を世に送り出してきた林光の隠れた名品、チェロ・ソナタ《十月の歌》。そしてユダヤの濃厚な祈りが音楽へ転写されているブルッフ作の《コル・ニドライ》。ベートーヴェンよりもさらに“楽器は声帯”であると気がつくことができるだろう。

*

チェロを知りたいという方にも、チェロを知っているという方にも、それぞれに新しい扉が用意されている2つのコンサート。深まる秋と物思いに耽る冬にこそ聴きたい音だ。

ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.30

ニコライ・ホジャイノフ

「音楽と詩は姉妹」
——日本語で和歌を愛でる
ロシア・ピアノ界の俊才

新進気鋭のピアニストが挑戦的なプログラムを披露する「ピアノ・エトワール・シリーズ」。

11月には、ロシアの人気ピアニスト、ニコライ・ホジャイノフが登場！

2010年のショパン国際ピアノコンクールで一躍有名になったホジャイノフは、繊細な音楽性が魅力。

さらに、勉強中の日本語が達者なことも、日本のピアノ・ファンのあいだで話題沸騰中だ。

来日ごとに大きく進化しているホジャイノフの今の音楽を、聴き逃すな！

文●高坂はる香 (音楽ライター)

詩情あふれるピアノイズム
こだわりぬいた美しい弱音

ピアニストが、演奏にあたってなにを大切にしているか。信念が強く確かであるほど、それは個性となって聴く者に強い印象を残す。

1992年生まれのコロライ・ホジャイノフも、若くしてすでに、自分だけの表現への強いこだわりを見せるピアニストだ。ロシアの若手という、大音量とパワフルな表現で魅せるというイメージがあるかもしれないが、ホジャイノフの場合はまったくタイプが違う。作品に詩的な感性でアプローチし、見出した自分だけのイメージを、独特の空想の世界でふくらませる。ロシアのピアニストらしい、しっかりしたタッチで繰り出す粒立ちのよい音も魅力なのだが、やはり圧倒的なインパクトを残すのは、こだわりぬいて鳴らされる美しい弱音。聴衆は、ホールの隅まで静かに広がっていくピアノシモに、息をひそめてじっと耳を傾ける。そんな、吸い込まれるような深い音と静寂が味わいたくて、来日のたびに会場に足を運んでしまう。

独特の美意識と想像力
その“養分”は世界の文学

ホジャイノフは、シベリア南部、中国国境付近のアムール河沿いの街であるブラゴヴェシエンスク生まれ。5歳でピアノを始め、6歳のころには師のすすめでモスクワに移り、ピアノの勉強を続けた。そのころからオペラが好きで、10歳のころにはワーグナーの楽劇に強い憧れを抱いていたそう。幼少期、絵本代わりに読んでいたのは古代ギリシャ神話の悲劇で、「それがワーグナーのオペラに惹かれるようになって

た理由かもしれない」という。

さまざまな文学作品に親しんでいるが、なかでも詩を好み、「音楽と詩は姉妹のようなもの」と語る。来日を重ねるうち日本の文学にも触れるようになったらしいが、もっぱら関心を抱いているのは、和歌の世界。松尾芭蕉や与謝蕪村など、日本語で読むことにも挑戦しているというからすごい。彼の音楽から感じられる、独特の美意識と想像力は一体どのように培われてきたのかと不思議に思うことがあるが、世界の優れた文学作品が大切な“養分”のひとつとなっていることは間違いなさだろう。

19世紀の音楽界を覗き見るような
粋なプログラム

今回のリサイタルでホジャイノフが取り上げるのは、ショパン、リスト、シューマンという、ロマン派の作曲家たち。彼の美点が存分に発揮されるような楽曲が並んでいる。

なかでも個性的なショパンには定評がある。もともとホジャイノフが注目を集めるようになったのは、最年少ファイナリストとなった2010年のショパン国際ピアノコンクールがきっかけ。強さと繊細さ、そして闇のようなものが共存するショパンの描写にはミステリアスな魅力があり、入賞を逃すも、活発な演奏活動を行うようになった。

得意のショパンから今回演奏するのは、《アンダンテ・スピアナートと華麗な大ポロネーズ》と3曲のワルツ。みずみずしい表現、豊かな詩情、そして舞曲における独特のリズムの揺れなど、聴きどころは多い。

シューマンは、2014年のリサイタルに続き取り上げる作曲家。ホジャイノフ曰

く、「シューマンは発明者であり、夢を見る人であり、純粋な魂を持った人。彼の音楽には、現実、幻想の境界にある絶妙なバランスを感じる」。繊細な音で紡ぐ《アラバスク》、夢と覚醒の間を行き来するような《幻想曲》に期待できそうだ。

そして楽しみなのは、リストはじめ6人の作曲家の合作である《ヘクサメロン》。ベッリーニのオペラ《清教徒》の行進曲のテーマに基づく変奏曲で、実演で聴けるのは希少な機会だ。ホジャイノフは、アンコールに好きなオペラ作品のトランスクリプションを披露して会場を盛り上げることが多いが、今回はメインプログラムのひとつとして演奏する。

リストによる華やかな序奏と主題に続き、リストがピアノ対決を行ったことで知られる名手、タールベルクによる第1変奏、教育者として名高いチェルニーによる第5変奏、そして夜想曲のような趣で、熱く優しく語りかけるショパンによる第6変奏などが次々現れる。作曲家ごとのキャラクターの違いを味わいながら聴いていると、19世紀の音楽界を覗き見るようで胸が躍る。粋な選曲がホジャイノフらしい。天才たちが、オペラの題材をとっておきの玩具として腕を振った楽曲で、遊び心もチラリと見せてくれるだろう。

*

すでに世界各地で演奏活動を行うホジャイノフだが、昨年モスクワ音楽院を卒業したのち、ドイツのハノーファー音楽大学に学びの場を移した。名教師として知られるアリエ・ヴァルディのレッスンは刺激に満ち、日々発見があるという。前回の来日からまた一歩進んだこだわりの表現で、ホジャイノフ・ワールドに誘ってくれることだろう。

チケット発売中

ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.30
ニコライ・ホジャイノフ ピアノ・リサイタル

11.19(土)開演15:00 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール

[曲目] ショパン：アンダンテ・スピアナートと華麗な大ポロネーズ 変ホ長調 作品22

ショパン：ワルツ第6番 変ニ長調 作品64-1「小犬」

ショパン：ワルツ第9番 変イ長調 作品69-1「告别」

ショパン：ワルツ第10番 口短調 作品69-2

リスト他：ヘクサメロン—ベッリーニ《清教徒》の行進曲による華麗な大変奏曲

シューマン：アラバスク ハ長調 作品18

シューマン：幻想曲 ハ長調 作品17

チケット(税込) 一般 正面席3,500円 バルコニー席2,500円

U-25*(バルコニー席対象)1,000円/メンバーズ 正面席3,200円

※やむを得ぬ事情で曲目・曲順が変更となる場合がございますので、予めご了承ください。
*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書をご提示ください。

Review

レビュー

MUSIC

ピアノ・エトワール・シリーズ アンコール! Vol.6
アレクサンダー・ガヴリリュク ピアノ・リサイタル
7.16(土) 彩の国さいたま芸術劇場 音楽ホール



深い打鍵で楽器を鳴らし切る演奏が魅力のガヴリリュクのリサイタルは、シューベルト《ソナタ第13番》の詩情豊かな弱音の世界で開始。ショパン《幻想曲》は翼を広げるような響きから、彼らしいエネルギッシュな演奏に。「英雄ポロネーズ」の中間部でのスピード感に目を見張ったあと、後半のロシア・プログラムでついに本領発揮。その中でプロコフィエフ《ソナタ第3番》の強烈な響きに光る抒情性や、ラフマニノフ《音の絵》での陰鬱な表情も印象的だった。期待のバラキレフ《イスラメイ》はすさまじい打鍵だが、技で圧倒するだけでなく物語性が見え、ガヴリリュクの並外れた音楽性に改めて感嘆した。

Photo©加藤英弘

PLAY

オックスフォード大学演劇協会 (OUDS)
『夏の夜の夢』
8.7(日) 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール



シェイクスピア没後400年を記念し、今年是世界中でシェイクスピア劇が上演されており、あらためてその功績がたたえられている。その偉大な作家の生まれた英国で、創設130年の歴史と伝統を誇るオックスフォード大学演劇協会 (OUDS) が来日。言わずと知れた傑作喜劇『夏の夜の夢』を上演した。開演前からステージ上ではライブ演奏が行われ、お祭り気分。劇中も軽快な音楽をバックミュージックに、スピーディーかつ弾むような、若者らしい「夏夢」をつくり出した。美しいクイーンズイングリッシュのセリフも耳に心地よく、本場ならではの魅力を伝えてくれた。

Photo©引地信彦

PLAY

ラヌー・テアトル
『NOX(ノクス)～夜のふしぎ～』
8.9(火)・10(水) 彩の国さいたま芸術劇場 小ホール



1996年にベルギーで設立され、国内外で活動する「ラヌー・テアトル」による公演。大人も一緒にワクワクできるような、詩的で奥行きある子ども向け舞台を届けてくれた。主人公は、一日の仕事を終え、ぐったりと疲れた男。眠ろうと寝室に入り、金魚にエサをやり、スリッパを脱いでベッドにもぐり込むが、電灯が点滅したり、ラジオが鳴ったり、布団が生き物のように動き出したり。すると、もう一人の自分がドアから入って来て……。セリフなしで、男の夢をのぞいているかのような不思議で奇妙でキュートな作品に、子どもたちも声を上げて反応していた。

Photo©宮川舞子

DANCE

Noism0
『愛と精霊の家』
8.20(土)・21(日) 彩の国さいたま芸術劇場 大ホール



りゅうとびあ 新潟市民芸術文化会館の専属舞踊団として設立された「Noism」の芸術監督・金森穰が立ち上げた新たなプロジェクトカンパニー「Noism0 (ゼロ)」公演。2015年に一夜限りで上演し、反響を呼んだ作品が復活した。4人の男たちは愛の多面性を、人形・舞踊家・妻・母になれぬ女……と姿を変えていく女性は、愛の孤独を象徴。技術力の高いダンサーたちと一人の俳優が、愛や死に迫る哲学的な作品を、明確に立ち上げた。特に、繊細な演技と強靱な身体を見せた、井関佐和子の圧倒的な存在感が忘れがたい。整然と並んだ照明が星のように配された装置も美しかった。

Photo©Kishin Shinoyama

PLAY

ワークショップ公演
『ドコカ遠クノ、ソレヨリ向コウ 或いは、泡ニナル、風景』
8.25(木)～28(日)
彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO(大稽古場)



10代から70代まで、25名の出演者とのワークショップを経てつくり上げた藤田貴大 (マームとジブシー) による公演。JR福知山線の脱線事故をモチーフに、2008年に初演された藤田の初期作品が、新たなカタチでよみがえった。あの電車に乗った人たちが送っていたなげない日々、事故が起こらなければ続いたであろう日常、たまたま、乗らなかった私たち……。無差別に多くの人たちの命が一瞬にして失われた悲劇を、一つひとつの命の輝きから照射する物語は、年齢幅の広いキャストによってリアリティーが増す。舞台上には、静かに繊細に折り重ねた時間が紡がれていた。

Photo©細野晋司

ラヌー・テアトル『NOX(ノクス)～夜のふしぎ～』
アフターイベント

終演後にアフターイベントが行われ、二人の俳優が作品に込めた思いを語ってくれた。質疑応答では、子どもたちから質問を募集。「引き出しの中のものをどうやって一瞬で消したんですか?」「布団の中にいた男の人がドアに移動したトリックは?」など、舞台上で起こった手品のような仕掛けに興味が集まった。次に「夢の中でできごとを話してみよう」という課題を客席に投げかけ、「空を飛ぶ」「雲を食べる」など、ファンタジックなイメージを出してもらった。それを受け最後に、「みなさんがやったように、自由にアイデアを話す作業が大切だった」と創作の秘密を教えてくれた。



Photo©宮川舞子

PLAY DANCE MUSIC EVENT CINEMA

大ホール 小ホール 音楽ホール 映像ホール 情報プラザ = 彩の国さいたま芸術劇場

お子様から楽しんでいただける公演です。
光の庭プロムナード・コンサートには年齢制限はありません。

PLAY

9. 16 (金) - 19 (月・祝)
マームとジブシー
『クラゲノココロ』『モモノパノラマ』『ヒダリメノヒダ』
彩の国さいたま芸術劇場 NINAGAWA STUDIO (大稽古場)
9.16 (金)・17 (土) 19:30、18 (日) 14:00 / 18:00、19 (月・祝) 14:00

10. 1 (土)
彩の国さいたま寄席 四季彩亭
～立川志らくと気鋭の若手競演会
小ホール 開演 14:00 詳細はP.21

DANCE

10.28 (金) - 30 (日)
フィリップ・ドゥクフレ カンパニーDCA
『CONTACT-コンタクト』
大ホール 10.28 (金) 開演 19:00、29 (土)・30 (日) 開演 15:00
詳細はP.8-9

MUSIC

9. 17 (土)
光の庭プロムナード・コンサート第87回
フルートとオルガンで聴くフランスの響き
情報プラザ 開演 14:00 *入場無料
[出演] 田宮 亮 (オルガン) & 岩崎花保 (フルート)
[曲目] L. N. クレランポー:《第2旋法の組曲》より
F. クーブラン:《王宮のコンセル 第4番》より
N. ハキム: サルヴェ・レジナ
J. アラン (M. C. アラン編曲): 3つの楽章 ほか

10.10 (月・祝)
イザベル・ファウスト
& クリスティアン・ベザイデンホウト
オール・バッハ・プログラム
音楽ホール 開演 15:00 詳細はP.21

10.22 (土)
レ・ヴァン・フランセ
音楽ホール 開演 15:00 詳細はP.21

10.29 (土)
光の庭プロムナード・コンサート第88回
ロンドンからテューリンゲンへの旅
情報プラザ 開演 14:00 *入場無料
[出演] モニカ・メルツォーヴァ (オルガン・ソロ)
[曲目] ヘンデル: オラトリオ《ソロモン》HWV67より「シバの女王の入場」
ブル: スペイン風パヴァーヌ
パーセル:《音楽の神、ムーサよ》より《グラウンド》ハ短調
J. S. バッハ: 最愛の兄の旅立ちに寄せるカプリッチョ BWV 992 ほか

10.29 (土) 30 (日)
[共催公演]
加藤訓子 PROJECT IX
— PLEIADES (ヤニス・クセナキス)
音楽ホール 開演 17:00 詳細はP.21

11. 5 (土)
NHK交響楽団 12人のチェリストたち
音楽ホール 開演 14:00 詳細はP.14-15

11.12 (土)
バッハ・コレギウム・ジャパン
J. S. バッハ《ミサ曲 口短調》
音楽ホール 開演 15:00 詳細はP.12-13

11.5 (土)【関連企画】 鈴木雅明による作品解説レクチャー
音楽ホール 開講 17:30 ※要申込、締切9/30 (金) 必着

11.19 (土)
ピアノ・エトワール・シリーズ Vol.30
ニコライ・ホジャイノフ ピアノ・リサイタル
音楽ホール 開演 15:00 詳細はP.16-17

EVENT

10.15 (土)
スペシャルイベント
蜷川幸雄と「彩の国シェイクスピア・シリーズ」
大ホール 開演 14:00 ※要申込、締切9/23 (金) 必着
※関連企画有 詳細はP.23

●…彩の国さいたま芸術劇場 休館日

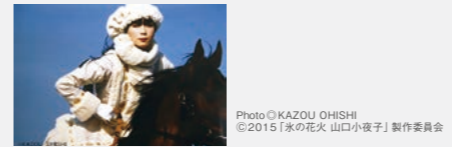
2016 9							10							11						
S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S	S	M	T	W	T	F	S
			1	2	3					1				1	2	3	4	5		
4	5	6	7	8	9	10	2	3	4	5	6	7	8	6	7	8	9	10	11	12
11	12	13	14	15	16	17	9	10	11	12	13	14	15	13	14	15	16	17	18	19
18	19	20	21	22	23	24	16	17	18	19	20	21	22	20	21	22	23	24	25	26
25	26	27	28	29	30		23	24	25	26	27	28	29	27	28	29	30			
							30	31												

【埼玉会館 改修工事のお知らせ】
2017年3月31日(金)まで、埼玉会館は改修工事のため休館いたします。

CINEMA

彩の国シネマスタジオ
【全席自由・各回入替制・整理券制】
大人 1,000円 / 学生 500円 【入場時に学生証をご提示ください】
※料金は当日現金支払いのみ

10.13 (木)～16 (日) 映像ホール
『氷の花火 山口小夜子』
(2015年/日本/97分)
[監督] 松本貴子
[出演] 山口小夜子、山本寛斎 ほか
13 (木)～15 (土) 10:30 / 14:00 / 18:00
16 (日) 10:30 / 14:00
※16日14:00終了後、松本貴子監督によるアフタートークあり



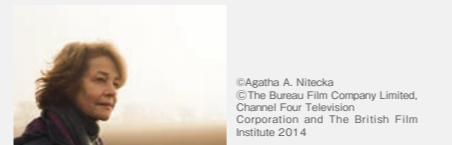
11.10 (木)～13 (日) 映像ホール
『すれ違いのダイアリーズ』
(2014年/タイ/110分)
[監督] ニティワット・タラートン
[出演] スクリット・ウィセートケーオ、チャーマーン・ブンヤサク、スロワット・カナロット ほか
10 (木)～12 (土) 10:30 / 14:00 / 18:00
13 (日) 10:30 / 14:00
※13日14:00終了後、芹沢高志氏 (さいたまトリエンナーレディレクター)、木全義男 (彩の国さいたま芸術劇場館長)、竹石研二氏 (深谷シネマ館長・埼玉映画ネットワーク理事) による「さいたまトリエンナーレ2016」特別トークセッション開催



12.8 (木)～11 (日) 映像ホール
『スポットライト 世紀のスクープ』
(2015年/アメリカ/128分)
[監督] トム・マッカーシー
[撮影監督] マサノブ・タカヤナギ
[出演] マイケル・キートン、マーク・ラファロ、レイチェル・マクアダムス、リー・シュレイバー、ジョン・スラッター ほか
8 (木)～10 (土) 10:30 / 14:00 / 18:00
11 (日) 10:30 / 14:00



12.22 (木)～26 (月) 映像ホール
『さざなみ』
(2015年/イギリス/95分)
[監督] アンドリュー・ハイ
[出演] シャーロット・ランプリング、トム・コートネイ ほか
22 (木)～25 (日) 10:30 / 14:00 / 18:00
26 (月) 10:30 / 14:00



PLAY DANCE MUSIC

大ホール 小ホール 音楽ホール 映像ホール 情報プラザ = 彩の国さいたま芸術劇場

*U-25チケットは公演時、25歳以下の方が対象です。入場時に身分証明書を提示ください。

PLAY

発売中
彩の国さいたま寄席 四季彩亭
～立川志らくと気鋭の若手競演会
10.1 (土) 14:00 小ホール
[出演] 立川志らく、三遊亭萬橘、立川志ら玉、立川らく次、神田松之丞
チケット(税込) 全席指定 一般3,000円
ゆうゆう割引(65歳以上・障がい者)2,000円
メンバーズ 2,700円

発売日 一般 10.1 (土) メンバーズ 9.24 (土)

彩の国さいたま寄席 四季彩亭
～彩の国落語大賞
受賞者の会 春風亭一之輔
2017年 1.21 (土) 14:00 小ホール
[出演] 春風亭一之輔 (彩の国落語大賞・2席) ほか
チケット(税込) 全席指定 一般3,000円
ゆうゆう割引(65歳以上・障がい者)2,000円
メンバーズ 2,700円

発売日 一般 10.10 (月・祝) メンバーズ 10.9 (日)

1万人のゴールド・シアター2016
『金色交響曲
～わたしのゆめ、きみのゆめ～』
詳細はP.3-5

DANCE

発売中
フィリップ・ドゥクフレ カンパニーDCA
『CONTACT-コンタクト』
詳細はP.8-9

発売中
NBAバレエ団
『Stars and Stripes』
～スターズ&ストライプス～
詳細はP.10-11

発売日 一般 9.24 (土)

近藤良平と障害者によるダンス公演
近藤良平とハンドルズによるダンス公演
『どうしても やりたいことが あります』
11.12 (土)・13 (日) 15:00 小ホール
[構成・振付] 近藤良平
[出演] ハンドルズ、近藤良平、山本光二郎、スズキ拓朗、埼玉県立芸術総合高校ダンス部
チケット(税込) 全席指定 一般2,000円 / 障がい者割引1,500円
[主催] 埼玉県 [共催] 公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

発売日 一般 11.26 (土) メンバーズ 11.23 (水・祝)

Noism1『新作』
2017年 2.10 (金)～12 (日) 予定 小ホール
[演出振付] 金森 稷
[出演] Noism 1
[主催] 公益財団法人新潟市芸術文化振興財団
[共催] 公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団
※詳細が決まり次第発表いたします。

発売日 一般 12.3 (土) メンバーズ 11.26 (土)

ピナ・バウシュ ヴッツパタル舞踊団
『NELKEN-カーネーション』
2017年 3.16 (木)・17 (金) 19:00、
18 (土) 15:00、19 (日) 14:00 大ホール
チケット(税込)
一般 S席 11,000円 A席 7,000円 B席 5,000円
U-25* S席 7,000円 A席 5,000円 B席 3,000円
メンバーズ S席 10,000円 A席 6,300円 B席 4,500円

MUSIC

発売中
イザベル・ファウスト
& クリスティアン・ベザイデンホウト
オール・バッハ・プログラム
10.10 (月・祝) 15:00 音楽ホール
[曲目] J. S. バッハ:
ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ第3番
無伴奏ヴァイオリン・ソナタ第2番
ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ第1番
トッカータ ニ短調 BWV 913
ヴァイオリンとチェンバロのためのソナタ第6番
チケット(税込)
一般 正面席 7,000円 バルコニー席 6,000円
U-25*(バルコニー席対象) 3,000円 / メンバーズ 6,300円

発売中

レ・ヴァン・フランセ
10.22 (土) 15:00 音楽ホール
[出演] エマニュエル・バユ (フルート)、
フランソワ・ルルー (オーボエ)、ポール・メイエ (クラリネット)、
ラドヴァン・ヴラトコヴィチ (ホルン)、
ジルベール・オダッド (バスン)、エリック・ル・サーージュ (ピアノ)
[曲目] オンスロー: 木管五重奏曲 へ長調 作品81
ベートーヴェン: ピアノ、フルートとバスーンのための三重奏曲 ト長調 WoO 37
エスケシュ: 六重奏曲 (メカニック・ソング) (レ・ヴァン・フランセに献呈)
ジョリヴェ: セレナード——オーボエ主題を伴う木管五重奏のための
ブランク: 六重奏曲
チケット(税込)
一般 正面席 6,000円 / メンバーズ 5,500円
※バルコニー席・U-25 予定枚数終了

発売中

加藤訓子 PROJECT IX
— PLEIADES (ヤニス・クセナキス)
10.29 (土)・30 (日) 17:00 小ホール
※当初発表した公演時間が変更となりました。
[曲目] クセナキス: プレイアデス
クセナキス: ルボン
チケット(税込)
全席自由 一般 5,000円 / メンバーズ 4,500円
[主催] kuniko kato arts project
[共催] 公益財団法人埼玉県芸術文化振興財団

発売中

NHK交響楽団
12人のチェリストたち
詳細はP.14-15



画●磯良一

岩松はいいなあ、節操がなくて

文●岩松了

蛭川さんを偲び、思い出話をしているうちに演劇界のその世代の巨星たちの話になるのは、ごく当然の流れではあった。私の中で蛭川さんと並ぶ演出家で、早稲田小劇場を率いた鈴木忠志さん、体験としては蛭川さんよりも先にあった。早稲田の喫茶店の二階のアトリエで『夜と時計』という芝居を観たときの衝撃は忘れ難い。シェイクスピアのマクベスをベースにした芝居だった。あのバーナムの森が動くシーンを、役者たちが足を踏み鳴らして表現していた。

その後、知己を得て、鈴木さんと話す機会を持つこともあったし、鈴木さんから仕事を発注されたこともあった。その都度、そのエネルギーの凄さに感心させられてきた。富山県の利賀村、水戸芸術館、静岡芸術劇場、と文字通り、演劇一筋に歩いている人だ。私とは言えば、テレビの仕事があれば、テレビのためにコントも書いたし、役者として出演もした。映画の監督もやって、こんな楽しい仕事があるのかとも思った。そんな私にある時、鈴木さんが言ったのだ。

「岩松はいいなあ、節操がなくて」

残念なことに、その時の状況を覚えていない。むろん、鈴木さん独特の嫌味だと私は思ったし、そう感じてしまった裏には演劇以外のことに無闇に手を染める自分の生活ぶりが多少の後ろめたさとしてあったことは事実だ。が、こうして年月が経った今、その時の状況を覚えていないことが残念だ。果してホントに嫌味だったのか、ということの検証が出来ない。だいたい、欠点のように使われる節操がないという言葉が鈴木さんの中ではそうでなかったのだとも考えられるじゃないか。ましてや彼が、自分の爪でも見つめながら「岩松はいいなあ、節操がなくて」と言ったのだとしたら！

その時の状況が思い出せない。言葉はそれのみで成立するわけではない、と若い演劇人に能書き垂れてる私なのに。それとも、いまだに後ろめたさをひきずっている私だということの左証でしかないのか？ 今、その言葉を問題にするのは。

そのことを確かめるためだけに鈴木さんに会いに行く？ うん、生きているということは案外にそういうことなのかもしれない。ただそれだけのために！

いわまつ・りょう

劇作家、演出家、俳優、映画監督と幅広く活躍。さいたまゴールド・シアター『船上のピクニック』『ルート99』の劇作を手掛けた。12月『シブヤから遠く離れて』（作・演出）をシアターコクーンで上演予定。